

2017/2/17

(日々雑感 19)



動物の世界は厳しいです。

人間に比べてその寿命が短いせいもあってか、例えば馬にしろ、キリンにしろ、生後数時間で自分の足で立たなくては生きていけません。なぜなら立たないと高いところにあるお母さんのお乳に口が届かないからです。

ところが人間は馬やキリンの何倍も生きるライフタームの長さもあってか、立ち上がるまでにおよそ一年を要します。一年を要しますが、人間は手を使えるので、お母さんが赤ちゃんを抱き上げてお乳を口に含ませることが出来るので、赤ちゃんは飢え死にすることはありません。

それはさておき、最近ある話をふと思い出しました。

小学校の社会科の時間だったか先生が「弥生時代の日本人の平均寿命は32歳位だったのかもしれないそうです」という話です。確か断定的な物言いではなかったと思います。

うろ覚えなので寿命年齢は正確ではないかもしれませんが、かといっていちいちググるのもなんか最近疲れてくるので、横着ですがその記憶をそのまま使わせて頂きます。

医学がなきに等しい時代だし、栄養状態も遙かに悪かっただろうし、縄文時代ほどではないにしろ、食料が安定的に得られなかったことなどから、寿命と言うより怪我や疫病や飢えで早死にしたのではないかと思います。

現在ぼくは63歳ですが、下手をすると今の自分の子供の年齢より少し上で、もう死んでしまっていたわけです。子供にはぼくから見ての孫がいます。一歳数ヶ月と一年未満の子達。

ということは、弥生時代のひとは、もっと結婚、出産年齢が若かっただろうとしても、まだ小さな子供を残したまま多くの親が他界していたことになります。

では、誰が育てたのか？という、じいさんばあさんも若くして他界している訳ですから、恐らく同じような年齢の周りの人たちが協力して、自分の子と同様に育てていたのではないかと推測するのです。始まったばかりの共同農耕生活の中での、村人全員保父さん

保母さん状態。

しかし、そういったこともあってか、子供の自立は馬やキリン並みではないにしろ、いまよりずっと早かったような気がします。

子供がそう思ったかどうかは定かではありませんが、自分の寿命が32歳だと無意識にも感じていたとしたら、子供としても一刻も早く大人になりたいと思ったのではないのでしょうか。

ところが弥生時代に比べて二倍半以上も平均寿命が延びている現在、30歳になっても大人になれない人間が出てくるようになりました。あるいは、大人になりたくない人間もうじゃうじゃ出てくるようになっていきます。

これは全くのぼくの独断的推測ですが「別に急がなくても人生長いんだから」ということ以上に、多分周りにそうをしてまで「ああいう風な大人に早くなりたくない」という大人が周りにいないこと、今ひとつはそうをしてまで大人になったとしても何も良いことがないことがあるのではないのでしょうか。逆に言えば子供でいた方が得だと思ふ心理。価値観。ぼくが見るに、最近の大人はアタマとこころと身体と言う視点から見た場合、とにかく身体に重きを置きすぎると思えます。健康、健康、シェイプアップ、ボディエクササイズなどなど。

それは決して悪いことではないのですが、バランスが悪いような気がします。簡単に言うと「偏重」

そのせいかどうかは分かりませんが、身体を磨き、且つ栄養状態も抜群ですから男女とも子供を作るのに何の問題もない一方、アタマとこころにバランス良く視野が開けていないために「大人になれない」「大人になりたくない」「子供のままでいたい」親が大量にでてきているのではないのでしょうか。

身体にのみ価値を置く限り、年を重ねることはマイナス要素にしかありません。だから子供のまま、若いままでいたい。若いほど価値があるになっていないのでしょうか？若者偏重。

しかし、身体以外、アタマとこころにも視野を広げれば、経験の積み重ねによる、言い換えれば年を重ねることによるプラスの価値が山ほどあることに気がつくのではないかと思います。

そうでないと、苦勞してまで、肉体的に歳をとっていく意味なんてまるでないんですから。相殺してあまりある価値がアタマとこころの磨き方にあるはずです。

三つバランス良く、が良いと思う次第です。

弥生時代、人々はイヤでも毎日ボディエクササイズの日々だったでしょう。動かないと生きていけないからです。そうしてその人達は、身体だけでなくアタマやこころも使っていた。身体以上にもっと使いたいと思っていた。それがその後の、飛鳥、奈良、平安の時代を造るあるいは創る元や礎になっていったのではないのでしょうか。